

馬とumaに
未来をのせて

久保野 桂子



受賞のことば

初めてのエッセイ賞応募で入選との知らせをいただき、ありがとうございます。
なんとなくの気取ずかしさと、もしかして?の期待を込めて、こっそり該当ページを開く瞬間、名前があった!と嬉しさがこみ上げる気持ち。そんなドキドキワクワクを予選・最終と2度も経験できて幸せです。
今夏、馬産地・北海道ひだか町を巡った際に書きたい気持ちを高めてくれたサラブレッド達と、拙筆ながらの入賞を共に喜んでくれた家族と仲間へ感謝を。

プロフィール

1974年東京都生まれ。高校時代、ミホノブルボン可愛い牝馬だと思い込んでいた。2年前、国家公務員からおむすび屋へ転身。第2の人生、紆余曲折ながらも幸せ増大中。目下の推しは駿島克駿ジョッキー。

「よし! 第二の人生やってみようじゃないか!」

そう心に決めた時、私は何のためらいもなく二十八年間勤めた仕事を辞めた。

大好きな仕事だったはず。長く苦楽を共にした仲間と離れることは不安だらけだったのに、いとも簡単に人生の第一章に幕を引いたのだった。

次の仕事を始動するまでの束の間の日々。毎週金曜日のルーティンだった土日開催の競馬予想も、仕事で疲れ果てた中でやるのではない。じっくり、ゆっくり、馬達の顔を思い浮かべながら考えたりできる。嗚呼、なんて至福の時。自然と頬が緩む。

そして、馬達のことを考えれば考えるほど、血統や生産牧場、放牧先でのトレーニングにまで思いを馳せるようになっていった。

こうなると、私の中ではなかなか厄介だ。寝ても醒めても…そう、馬達のことや頭から離れないのだ。自分とは人と比べられることが大嫌いなくせに、愛してやまな

い馬達のは片っ端から比較する。

「中距離ならば、このトゥザワールドの仔が一〇〇%能力発揮できる!」

「キタサンブラックの仔ならば、きつと他の馬より走るよね!」

積まれた競馬関連雑誌を忙しくめくり、色の付いた記号を書き込んでいく。自信のある予想には大きなハナマルを付けることだってある。そんな予想が好きでたまらないのだ。

話を少し巻き戻す。

そう、私は二十八年勤めた仕事を辞めたのだった。

次の職は目途を付けてある。外国人観光客に日本の食文化を伝えたい。知ってもらい、食べてもらって、日本のお米はこんなに美味しいものなのだという素敵な記憶を脳に刻んで欲しい。日替わりのおかずを付けて、定番のお味噌汁ではなくスープカレーを添えてみたら、きつと喜んでもらえるのではなからうか。

ワクワクしながら準備を整えていき、さあ最後に店の名前を決めなくちゃ。頭の中では決めていることがある。

一番の看板になる店名は愛してやまない存在で埋め尽くしたい。迷わず決めたその名は、

「美味むすびuma(ウマムスビウマ)」

美味しいおむすびを大好きな馬達に見守ってもらおうじゃないか。こだわりの店名に馬が「二頭」もいることだ。

テレビのニュースは毎日同じ話題で持ちきりだった。

「本日の新型コロナウイルス感染者数は〇千人…」

楽しみにしている毎週末の競馬は無観客開催となり、競馬場に足を運ぶことは許されなくなった。道行く人々は皆マスクを着け、行く先々で手を擦り合わせて消毒をする。外出を控え、交わす会話も減り、なんとも不気味で殺伐とした世界に一瞬で塗り替えられたようだった。

開店した店では感染対策を重ねた結果、お客様に喜んでらったおむすび定食は泣く泣く提供を中止した。

店内飲食は大きな感染リスクを伴うと考えたからだ。それ以降、お客様との接触が少なく済むよう、少数のお弁当販売のみに切り替えることにした。

街から人影が消えた。コロナは夢も希望も持ち去ってしまうのかと、半ばあきらめに似た気持ちで心の大半を占めていった。

テレビ中継は無観客の競馬場。

誰も見ていないパドックでも馬達はちゃんと周回しており、厩務員さんも淡々と仕事をしている光景に少々驚く。どのレースも鞭を入れたその音が静寂の競馬場に響き渡っていた。

画面を見つめながら思う。この唯一の楽しみであり、心の支えである競馬さえも、きつと近いうちに開催中止に追い込まれるだろうな。淋しいな、と。

自分が身を置くこの時代、この環境に、ネガティブな思想が止まらなかった。未曾有のウイルス・パンデミックに、店の経営も、ニンマリしながらする競馬予想の間も、全部全部奪われるのだ。そうに決まっている。

暗くて長いトンネルに放り込まれた感覚にすっかり支配された自分が嫌だった。明るい気持ちにはなれない毎日が続いてゆく。

ところがどうだろう。

競馬は全く止まらない。

中央競馬も地方競馬も関係者に感染者が出る度に対策を講じ、状況を公表する。驚くことに一日たりとも中止することなく開催し続けているではないか。

すべての競馬ファンのためにと推進力をフル回転させて、前へ前へ馬達は走り続けていた。

それに比べて自分はどうか。目の前の環境と状況に一喜一憂し、ファン(お客様)のために前を向いて走っているのだろうか。暗くて長いトンネルにいるのは、自分だけだとも思っているのか。ソラを使って走っていたのは、他の誰でもない自分自身だったのだ。

(※ソラを使う：レース時に馬の気が散り、走ることに集中力を欠くこと。)

その気づきを与えてくれた競馬は、以降も姿形を変えることなく走り続けていた。

私は今まで以上の感染対策と、「こんな時だからこそお客様に店の味を楽しんでもらいたい」という強い信念をもって通常営業を再開することにした。そんな思いに応えてくれた沢山のお客様が、笑顔で再び店に足を運んでくれるようになる。ただただ嬉しくて、息を吹き返すような感覚が体を駆け抜け、大きなパワーとなっていた。

東京オリンピックは無観客開催となり、思い描いていた外国人観光客に来店してもらうことは叶わなかったけれど、それでもチャンスはあるのだと信じて前を向くことができたのだ。

誰もが不安なコロナ禍で、あれだけ力強く歩みを進め

た競馬。走り続けた馬達が、小さな小さな店の未来に輝く光を与えてくれ、導いてくれたのだった。

あれから一年。

今日も店には沢山の笑顔が並んでいる。

大きなおむすびを頬張るお客様の姿を見ると、あの時あきらめずに店を続けてよかったと確信する。

歩みを止めないこと、歩み続けること、そして前を向いて走り抜けること。あの時の競馬界と馬達の頑張りに励まされ、鼓舞されて今日この光景を眺めることができただ。

そして今。また週末には至福の予想タイムがやってくる。忙しくなった店に時間を取られることも多く、じつくり、ニンマリと予想を楽しむことは少しだけ減ってしまっただけだ。

「今日も元気だねえ！」

そう声をかけてもらうことが増えたように思う。

今日もターフを駆け抜ける馬達と一緒に、私(uma)もこれからの毎日を元気に走り続けたい。

負けないように。あきらめないように。